［特別講演Ⅱ］

辺境としての九州

ヴォルフガング・ミヒェル
九州大学名誉教授

近世日本では江戸や上方が日本の政治・経済・文化の中心となる一方，遠く離れた九州もまた対外交流における重要な役割を担っていた．海外交渉の窓口である「4つの口」のうち3つ（長崎・対馬・薩摩）が九州にあり，日本もまた世界に広がる国際交易網に組み込まれていた．寛永12（1635）年に海外渡航が禁止され，朱印船貿易が途絶えた後も遠方への憧れは消えず，むしろ異国の人やものに対する好奇心は高まったようである．一般に辺境の地は越境，接触，折衷，分離の場であり，夢を追う場でもある．それは医学の世界においても変わらない．

長崎遊学を志す者は幕末まで絶えることがなく，対馬，壱岐，筑前を経由し江戸へ向かう「朝鮮聘礼使」（朝鮮通信使）一行の医師らは各藩からの歓迎と接待を受け，人々の注目を集めた．オランダ商館で勤務する医師，外科医，薬剤師が2世紀にわたって九州の医療界に大きな影響を与えたことは言うまでもない．

辺境では中央ほど管理が行き届かないこともある．当時の人，もの，情報の往来を調べると，公式の交流とは別に陰で癒着や密貿易が横行している．医学，薬学，航海術に関する西洋の書籍の輸入は寛永18（1641）年に正式に認められ，長崎に入港する船に積まれた漢籍も検閲を受けた後は自由に流通していたが，輸入禁止の書籍，例えば明朝の宮廷で活躍したイエズス会士の著書も長崎の唐人屋敷を経由して九州に入った形跡がある．また，1828年の「シーボルト事件」で明るみに出た国禁の書や地図などの収集は，出島オランダ商館が発足した1640年代から行われていた（シャムベルゲル，カンプホイス，クライアー，ケンペル，ツンベリー，ティツィング，ブロムホフ）．このような活動は，地元の協力の下で進められ，脇荷や抜け荷の扱いも状況次第であった．一部の中国商人が春先にまず薩摩で荷を売りさばき，その後中国で乗組員を交代させ，新たに購入した品々を長崎に運んでくるといったことは商館医ケンペルも知る公然の秘密だった．

語学の重要性がいち早く認識されたのも九州である．平戸イギリス商館の通詞は「ジュレバッソ」（Jurebasso < juru bahāsa）と呼ばれており，17世紀初頭の海外貿易におけるマレー語の重要性を裏付けている．当時の九州ではスペイン語やポルトガル語に堪能な若者は珍しくなく，寛永16（1639）年に最後の南蛮人が追放された後もこれらの言語はしばらく使用されていた．貞享2（1685）年に商館長クライアーは江戸で紅毛流外科の免許を受けた老通詞西元甫の流暢なポルトガル語を讃えたが，次の世代の通詞たちが父親の職を継ぐにはオランダ語を修得し，オランダ人が立ち会う「検定試験」を受けねばならなかった．18世紀初頭から対馬藩に仕え，朝鮮との外交にあたった儒学者雨森芳洲は釜山の草梁倭館で朝鮮語を学んだ後に対馬府中に朝鮮語通詞養成所を創設し，体系的な朝鮮語教育によって日朝間の良好な意思疎通を図った．この学校では明治期まで通詞と貿易商の養成が行われている．

杉田玄白は回想録『蘭学事始』で長崎における蘭学研究を蘭学の「単なる準備期」と位置づけているが，『解体新書』以前にも優れた研究は存在した．17世紀末頃の『阿蘭陀外科指南』には通詞の医学用語集や歴代商館医が伝えた治療法が収録され，通詞本木良意が天和2（1682）年に抄訳したレメリンの解剖書『小宇宙図観』は写本として広く流布した．寛延元（1748）年に25歳で大通詞となった吉雄耕牛がまとめた『正骨要訣』，『布斂吉黴瘡篇』，『因液発備』などの抜粋と要約は，家塾「成秀館」の多くの門下生を通じて全国各地に広まり，蘭学の発展に大いに寄与した．耕牛が『解体新書』の序文を依頼されたことも彼の実力と名声の証である．